

別表1

共同利用・共同研究拠点

利用可能施設、設備等生態学研究センターの共同利用施設、設備、生物標本、データベース等の名称	概要
調査船「はす」	琵琶湖を対象とする学術研究、定期観測や実習に活用されてきた高速調査船。総トン数8.5トン。定員20名。最大航行速度20ノット。
大型分析機器（安定同位体比精密測定用分析システム）	炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置（熱分解型元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）、LC/C（高速液体クロマトグラフ付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計delta V plus、PreCon-GasBench II（自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス）、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計delta V advantageの計2台
大型分析機器（DNA分析システム）	DNA分析システムは、定量PCR、PCRなどDNA分析用の一般的な機器が導入されている。DNAシーケンス、多型解析、発現定量解析、倍数性推定などの実験を行うことが可能。また、次世代シーケンス解析技術についても、ノウハウの提供をおこなっている。構成：DNAシーケンサ、遺伝子発現分析装置、卓上型次世代シーケンサなど
シンバイオトロン	シンバイオトロン（シンバイオは生命の共生を、トロンは実験施設を意味する）は、従来の個体を対象とした環境制御装置ではなく、地球上の代表的な生態系における生物群集とその環境を対象とし、物理・化学・生物的複合環境を人為的に制御できる新しいタイプの生態系実験施設。シンバイオトロンを用いて、生物多様性の維持機構、崩壊過程および生物多様性と生態系機能との関係を実験的に明らかにすることを目的として設置。テラトロン、アクアトロン、ズートロンの3つのシステムから構成される。
圃場・CERの森	センター圃場には実験圃場、樹種植栽林-1、-2、-3、林木群集実験植物園-1、-2、-3がある。圃場（現在約2000平方メートル）およびビニールハウス7棟を利用した植物の育成、生態学的な操作実験が可能。圃場には、アブラナ科植物、河川植物（ツルヨシ、オギ、ヨシ）、セイタカアワダチソウ、アキノキリンソウ、ブナ等が生育している。ビニールハウスでは、実験用のヤナギ、ブナ、アベマキ、コナラ、フサザクラ、クリ、マテバシイ等の実生を育てている。そのほかに林園として約1300平方メートルの区画が6つあり、区画1ではブナの木が約400本、区画2ではヤナギが植えられており、他の区画は多種の混交林として管理されている。
生物標本	京都大学理学部附属大津臨湖実験所および京大生態学研究センターの事業として、琵琶湖の生態系や生物の生態・生活史の長期変動を把握することを目的に、1962年から固有魚種であるイサザをはじめ、プランクトンおよびベントスを収集・保存したもの。
データベース	京都大学理学部附属大津臨湖実験所および京大生態学研究センターの事業として、1965年から継続的に行われている定期観測のデータを電子化したもの。本定期観測は、琵琶湖の北湖1定点と南湖3定点において、月に1回の頻度で実施されており、水温、pH、透明度、溶存酸素濃度、クロロフィル濃度のデータが利用できる。